
真剣で最強は恋してる

ブラッディクロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で最強は恋してる

【Nコード】

N0241Y

【作者名】

ブラッディクロス

【あらすじ】

闇との戦いで人生に幕を下ろした風林寺 隼人。実はこれは神のミスでお詫びに隼人は別の世界で生きることになる。その世界で無敵超人が大暴れ！！

ブログ前篇（前書き）

この小説は作者の初投稿作品に加えて作者のやりたい放題ですので
気に入らない人はブラウザバックしてください、それでもいいとい
う方はどうぞご覧ください

ブログ前篇

隼人 side

僕は風林寺 隼人じゃ。

最近なんじゃがよくわからんがいやな予感がするんじゃ。

???「おらああああ」

隼人「おつとと、いきなりじゃのうお主」

今まさに達人級に不意打ちされとるんじゃがな。

隼人「ぬりやああああ」

???「ぐああああ」

毎度毎度しつこいのう闇の連中。

闇「ぐっ…くそ…おいあいつを連れてこい…!!」

人質か？卑怯な連中じゃな。

闇「動くんじゃねえぞ…!!…無敵超人…!!…こいつがどうなって
もいいのか？」

兼一「くそ…!!離せ…!!」

美羽「……………」

「……………まさか兼ちゃんと美羽が捕まったのか…美羽は気絶させられとるのか。」

隼人「…二人をどうする気じゃ…お主らこんなことをしてただで済むと思うとるのか?」

闇「へっ今更どうなろうと知ったことじゃねえ無敵超人の首さえ取れりゃそれでいいんだよ!…!」

まさかここまで腐ったやつがいるとはのう。

そこで僕はほんの少し動揺してしまった。

闇「…!いまだかかれえ!…!…!」

!!いかん。

闇の武器組「……………おおおおおおお!…!…!…!」

「……………」

しまった!!これは間に合わんのう。

ドス!!ザシユウ!!ドスドスドス

闇「どうだやったか?」

せめてあの二人だけでも助けねば。

隼人「ぬりやああああああああ」

闇達「「「「ぐわああああああああ」」」」

兼一「長老！！！」

おお、兼ちゃん達は無事じゃったか。

兼一「長老！！！！しっかりしてください！！！」

隼人「おお……………兼ちゃん…すまんこんなことに巻き込んでしまった」

なるほど人間は死ぬときなんとなくわかるらしいが本当みたいじゃないのう。

隼人「すまんが…梁山泊の……………みんなにすまんと……………伝えてくれ」

兼一「そんな……………長老が生きて自分で伝えてくださいよ！！！！！！」

兼ちゃん男が簡単に涙を流すんじゃない。

隼人「すまんの……………僕は……………もう……………長くない……………だから兼ちゃん……………代わりに伝えてくれ……………」

隼人「それと美羽を……………守って……………やって……………く……………れ……………」

そして僕の人生は終わった。

兼一 side

兼一「長老？しっかりしてください！！！！返事をしてください！！！！」

そんな長老が死ぬなんて嘘だ。

兼一「嘘だ………嘘だ――――」

続く

ブログ前篇（後書き）

どうも初投稿なのでどんな感じかわかりませんが感想をいただけたら嬉しいです。

次話からも頑張ります

ブログ後編（前書き）

誤字脱字があればすいません

プロローグ後編

隼人 side

隼人「ぬう？ここはどこじゃ？」

周りを見れば真っ白の空間。

上も下も右も左も真っ白の空間。

「……あの……すみません……」

隼人「ひょ？なんじゃ？」

後ろから声かけられたから見たら兼ちゃんの妹と同じくらいの女の子がいた。

儼に気配を消しながら近づけるとはなかなかの手練れじゃ。

「……あの……ほんとにすみませんでした！！！！！！！！！！」

隼人「……？どういうことじゃ？」

「……？「実は私は人間からは神と呼ばれる存在なんです」

なるほどだから神々しい存在感があるのか。

神「それで私達は個人の人生の書類を見てる時に部下が……その……
…あなたの書類にコーヒーをこぼしてしまい残りの寿命のところに

かかってしまったときにあなたの死が決まっていまい本来死ぬはずではないあなたは死んでしまったんです」

隼人「なるほど……それで僕はどうなるんじや？」

神「え？あの…怒らないんですか？」

神が少しおびえながら聞いてきた。

隼人「怒るも何もミスをしたなら次はせぬように気を付ければいいんじやよ」

そう言うとき神は突然泣き出した。

隼人「……！……どうしたんじや？お腹でも痛くなったか？」

神「ヒック……いえ、違うんです…グス……ただそんな優しい人を間違えて殺してしまったのが申し訳なくて、っとお腹痛くて泣くって私子供じゃないです……！！」

隼人「おお、すまんすまん、見た目が子供じゃから老人はそう言うてしまったんじやよ」

神「むう………まあそれは自分でもわかってますからいいです」

神「それであなたを殺してしまったお詫びに別の世界で転生してもらおうと思ってここに來てもらいました」

隼人「別の世界？」

神「はい、そうですねと言っても大抵は人間が娯楽で作った世界を元にしてるんですが」

隼人「その儂が行く世界も娯楽を元にした世界なのか？」

神「そうですねゲームの「真剣で私に恋しなさい」というものです。といっても武術に没頭していたあなたは知らないとおもいますが」

隼人「そこはどんな世界なんじゃ？」

神「普通ですよ、まあ女性がすごく強い世界ですが」

隼人「ほう？おもしろそうじゃのう」

隼人「それで儂はその世界で何をしたらいいんじゃない？」

神「普通に人生を楽しむだけですよ？」

普通に……

神「別に強い人と闘ったりしてもいいですよ。あなたのやりたいようにやってください」

神「その世界の話はこれでもいいとして、あなたにはお詫びとして三つ願いを聞きます」

隼人「願いのう……」

願いかどうしようかのう……

神「デフォルトで身体能力や死ぬ前の記憶などはそのままですから」
なんと！！おまけもあるのか。

隼人「なら一つ目じゃが「身体能力の向上及び成長の限界突破」」

神「すでに身体能力はその世界の最強を超えてるんですが……まあいいですよ。あ、それと向こうの世界では一般的に「気」というものがあるのでそれも自由自在に操れるようにして限界突破もしておきますね」

この神は太っ腹じゃのう

隼人「それはありがたい二つ目は「自分にのみかかる重力制御装置」をくれんかのう、日常でも鍛えられるからのう」

神「わかりましたリストバンド型にしておきますね、それと、重力は際限なくかかるようにしておきます、もちろん周りには影響はでません」

これでいいかのう

隼人「最後はお主の知っておる娯楽の武術や技などの記憶をくれんかのう」

神「それもおまけでいいですよ、あとここでその技など修行していただくさい、数が多いので時間がかかりますがここは時間の概念がないのでいくら居ても大丈夫です」

やはりこの神は太っ腹じゃのう。

隼人「なら、「どんな動物でも懐かれるさらに会話も可能」こんなんでどうじゃ？」

神「ええ、大丈夫ですよ。」

すると神は目を閉じて何かブツブツ言い始めた。

神「これで願いは叶えました、それと年齢は18で娯楽で言う物語の開始です、容姿の方はあなたの昔の18歳のときのままで、それと筋肉ムキムキだとモテないかもしれませんがどんなに鍛えても細マツチヨにしておきました。」

たしかに頭に全然知らん武術の知識や技の使い方が入ってきた、てかおまけが多いのう、まあ助かってるからいいんじゃないが。

やっぱりこの神は太っ腹じゃのう。

神「まあ、あなたのように優しい人を殺してしまったお詫びですよ」

隼人「むう？今心を読んだのか？」

神「まあこれでも神ですからね」

見た目は子供じゃがな

隼人「とりあえずここで修行がしたいんじゃないが、どこですればいいんじゃない？」

神「あ、後ろの扉に入ってくればいいです。それと中に入った後に修行したい人や物を思い浮かべれば出てきますから。出たいと思えばその扉が出てきますからそれをくぐればここに戻ってこれます」

後ろを見たら真っ白の扉があった。

隼人「それはありがたい、では、行ってくるわい」

そして僕は扉を開けて中に入った。

隼人 side end

神 side

神「やっぱり悪いことしちゃったかな、帰ってきたらまた謝つとかないかね」

神「修行頑張ってくださいね、風林寺 隼人さん」

神 side end

続く……

プロローグ後編（後書き）

やっと書けました、次は遂に無敵超人がまじこいの世界に転生する
と思います。

次話も執筆中です

一話 無敵超人転生（赤ん坊になる）（前書き）

すいません技などは作者が個人的に好きなのが多いのでそこは勘弁してください

一話 無敵超人転生（赤ん坊になる）

隼人 side

隼人「ここでの修行は楽しかったのう」

ここには100年くらい居たかのいつても別のことを教わったり宴をしてたがの。

隼人「そろそろここを出て新しい世界に行こうかのう」

そう思ったら目の前に扉が現れた。

隼人「ひょー！びっくりしたわい、まったく老人の心臓に悪いわい」

そして扉をくぐるとあの神様がいた。

神「もう修行は良いんですか？」

隼人「もう十分じゃわい、というか十分すぎるくらいじゃがな」

神「そうですか、ではもう転生してもいいですか？」

隼人「ああ、大丈夫じゃ」

神「あなたが転生すれば私たちは何もできませんからその世界で新しい恋人でもつくって楽しい人生をお過ごしください、あ、あなたの運氣も上げておきましたこれは良いことが起こりやすいだけですので厄介事には巻き込まれると思いますから気を付けてくださいね」

厄介事がまあいつも通りにノリでなんとかなるじゃろ。

隼人「わかった」

神「では、その光の穴を通ってください、その先で新しい人生が待ってますから」

隼人「わざわざ面倒かけてすまんのう」

神「いえ、こちらこそ本当に申し訳ございませんでした。本当はもっとお詫びをしたかったんですが元々あなたは最強ですので存在が強すぎて干渉できないのでそれぐらいしかできなかったんです」

隼人「これだけしてくれれば十分じゃよ、そんなに気にせんでもよい」

隼人「それじゃあ、そろそろ行くわい。儂が死んだときにまたお主に会えるのを楽しみしておるわ、では、またの」

そして儂は光の穴に入って消えた。

隼人 side end

神 side

神「ほんとに申し訳ないことをしてしまったなあ、もし、彼が元の世界で私たちのミスがなく決められたときに死んでいたら、神にもなれたほどの魂の強さがあつたからなあ」

神は光の穴があつた方に向かつてそんなことを言っていたが、それは神以外は知らない事実。

神sideend

隼人side

ぬう！？光の穴に入つていきなり真つ暗になつたのに今度は急になるくなつたの

隼人「オギャー！！オギャー！！」（転生とやらは成功したから僕は赤ん坊になつとるのかの？）」

？？？「見てあなた元気な男の子よ」

？？？「確かにこの子は俺にどことなく似てる感じがするなあ」

この二人が僕の親かの？

母親「あなたの名前は隼人「風林寺 隼人」よ」

なんとこの世界でも同じ名前なのか、これも神がやってくれたのかのう

父親「一応名前を言っておくか、お前の父親の「風林寺 碎牙」だぞ」

母親「私は「風林寺 静羽」よ、よろしくね、私たちの隼人？」

なんと名前が息子夫婦と一緒に……まあ大丈夫じゃろ

隼人 s i d e e n d

こうして無敵超人の新たな人生が始まる

続く……

一話 無敵超人転生（赤ん坊になる）（後書き）

すいません、ヒロインは決定してるんですがどうやって主人公に惚れるか惚れさせるかが決定してないんでそこが時間がかかって遅くなるかもしれません、申し訳ありません。

主人公設定（ネタバレあり） 随時更新します（前書き）

一応ネタバレがあります、あと気でこんなことができるわけないと思っ
ていても無敵超人が普通に攻撃したら誰であろうと死にますから妥協
してください、申し訳ございません。

主人公設定（ネタバレあり）随時更新します

名前：風林寺 隼人

身長：原作開始時 185cm 小学生時 154cm

体重：原作開始時 89kg（筋肉があるのでかなり重い）

小学生時 43kg

職業：原作開始時 川神学園3年C組

年齢：原作開始時 18歳 小学生 11歳

性別：男

性格：穏やかだが基本的には戦闘は避ける。

真剣勝負では相手に合わせて殺さない程度には本気を出す、しかし外道には一切容赦しない。

家庭：父、母健在

好きな食べ物：肉

嫌いな食べ物：毒があるもの（致死量の毒でも平気だが体が少しピリピリするから）

武器：拳

異名：裏の世界では前世と同じく「無敵超人」と恐れられている

容姿

顔：上の中

髪：黒でまじこいのキャップより少し長い

瞳：黒

体型：神のおまけのおかげで筋肉はあるが見た目は細マッチョ

小学生時

ステータス

筋力：EX++(?)

脚力：SSS++(?)

耐久力：EX+(?)

気力：EX(?)

敏捷：EX++(?)

幸運：AA+

通常時

筋力：EX

脚力：SSS

耐久力：SSS+++

気力：SSS++

敏捷：EX

(○)のなかは重力制御装置を外した時のステータス、だがリンクが表示
できない。ちなみに

本気を出してこのステータスなので普段は力を

抑えているため2ランクダウンする。

原作開始時

筋力：測定不能 (例) 本気で地面を殴ると隕石が落ちたとき

並みの衝撃が出せる

脚力：EX+++++ (例) 普通に蹴ってもワンピースの嵐脚

以上のものが出せる

耐久力：測定不能 (例) 川神流禁じ手富士砕きを10発以上食

らっても平気

気力：測定不能 (例) 全力で気を解放しても一か月は余裕で

解放し続けれる

敏捷：測定不能 (例) 本気で移動すると光速並みの速度を出

せる

幸運：A A +

ちなみに本気でやれば武道四天王と川神鉄心が同時に襲ってきても

楽に返り討ちにできる

ちなみに川神 百代のステータス

筋力：S S +

脚力：S +

耐久力：E X （瞬間回復あり）

気力：S S

敏捷：S S + +

幸運：B +

川神 鉄心のステータス

筋力：S S + +

脚力：S S + +

耐久力：S S + + +

気力：S S S +

敏捷：S + + +

幸運：A -

備考

顔立ちは10人中9人は振り返るほどのイケメン、しかし告白されても大抵は断って

いるため彼女はいない。

精神年齢が老人のため困っている人を見ると放っておけないがお節介はほどほどにしている。

どんな状況に陥っても前世のこともあるため冷静に対処できる、そして相手の目を見る

と大体のことがわかってしまうから口には出さないが隠していることを見抜いてる。

神への願い

身体能力の強化、成長の限界突破

ちなみにこれがなくともすでにチートの無敵超人なのでチートを超えるチートになっている、

ちなみにこれにしたのは新しい世界に行くなら以前の自分を超えることと新しい武術を学ぶため。

自分用の重力制御装置

これは、無意識のうちに体が衰えないようにするためと無意識下での鍛練用である。

どんな動物でも懐かれるさらに会話も可能

これは、普通の人間は動物と会話などできないから動物が見た情報を手に入れる

ためと隼人が動物が好きだからどうせなら会話もしてみたいという願い。

幸運

神のおまけで付けてもらったもの、これは身の回りで起こるいいことが多くなる。

例えば：宝くじが当たったり、福引でいいのが出たり、など

しかし、神が言っていた通りほぼ確実に厄介事に巻き込まれる、

ちなみに厄介事に巻き込まれるのは決まっているので幸運は一切関係ない。

攻撃時は隼人は必ず腕を気で纏って攻撃する、この攻撃法は隼人しか使えないなぜならこれは

相手を殺してしまわないようにある程度怪我はするが致命傷はこの気が致命傷にはしないよう

している。誰にもばれない程度には常に纏っている。

あと神の世界で岬越寺 秋雨の医療技術を教えてもらったりしていて死んでない限りは氣と教えて

もらった医療技術で治療する。

小学校を卒業した後は宝くじで儲けた金で世界道場破り&ぶらり旅に3年間行くため日本を離れる、 その間にすさまじいほどの交流関係ができてしまう。

中学は行っていないが知識はあるため川神学園の入試は平気。

主人公設定（ネタバレあり） 随時更新します（後書き）

いろいろおかしなところもありますが許してください、おそらくですが使う技は本当に自分が好きな技ばかりなので許してください。
たまにネタ技も入ります
次話も頑張ります。

二話 小学生になり友達になる（前書き）

いきなり時間が飛びます

二話 小学生になり友達になる

隼人 side

僕は今公園で一休みしとるところじゃ。

隼人「ふう、やっぱり学校は面倒だな」

二回目の学校だからなあ。

小学校5年生になりました。

いきなり時間が飛んだ？ 気にすんな、俺は気にしない、ていうかしたくない。

なんでかって？ 赤ん坊のときがあったからだよ……察してくれ。

まあそれは置いて、神に頼んだ重力制御装置（以後リストバンドで表記します）は3歳の誕生日の時にいつの間にか付けられた。今は勝手に重くなるようにしとるから設定はせんでも大丈夫。

身体能力は子供の体ではいつも通りにはいかないから少し鍛練でもしないといけんかのう。

ん？ なぜか視線を感じるの？

????「ジーーーーー」

なんか、黒髪の女の子にすごい見られてる。

隼人「どうした？そんなにこっちを見て」

すると、女の子はびっくりしたのか物陰に隠れてしまった。

隼人「しかたないのう……」

僕は立ち上がり黒髪の女の子の方に行き

隼人「何か言いたいこともあるのか？」

???「!!!!!!……あ、あの……ね……えっと」

!!なるほどそういうことが

隼人「ん、そうだ俺と友達になつてくれないか？」

???「!!!!!!えっ?いい・の?」

やはりそうか

隼人「ああ、俺も友達がいらないんだよ、だから俺と友達になつてくれないか？」

???「うん・・・グスツ・・・うん・うん」

???「僕なんかが友達でもいいの？」

隼人「何言つてんだ、お前も友達になりたいから見てたんだろ、い

いに決まってんだろ」

???「うわ~~~~んありがと~~~~グスッ・・・友達に・・・なっ
てくれて・ありがとう」

隼人「今までつらかったんだろ、胸貸してやるから存分に泣けよ…」

そして彼女は胸に飛び込んできて泣いている……

〜10分後〜

隼人「どうだ？泣いてすっきりしたか？」

???「うん、ありがとう、でもごめんね、服汚しちゃって」

隼人「いや大丈夫だよ、気にしないでいいよ」

隼人「それより名前を聞いてなかったな俺は「風林寺 隼人」とい
うんだ」

???「私は「前山 小雪」よろしく、それと、友達になってくれ
てありがとう」

よく見ればこの子は隠しているが怪我をしているの……まさか……

隼人「なあ小雪？」

小雪「何？」

隼人「その怪我どうしたんだ？」

小雪「！！！！なんで怪我してるってわかったの？」

やはりか…学校のいじめでこれほどの怪我はありえん、なら親からの虐待しかないか……

隼人「小雪正直に答えてくれ、今児童相談所に電話すれば親は捕まるが別の親のところでは平和に暮らせる、がこのまま放っておけばいい小雪を手にかけるかわからん、だが決めるのは小雪だ、すまんが出会ったばかりでこんなことを言って」

小雪「僕は………」

僕はどちらの選択でも受け入れる、もし小雪に危機が迫ればわかるからの。

小雪「僕はお母さんと暮らしたい………」

隼人「そうか……ほんとに危なくなったらいつでも頼ってくれていいからな」

そう言いながら僕は小雪の頭を撫でた。

小雪「うん……ありがとう」

隼人「さて、こんな辛気臭い感じは終わり、何して遊ぶ？」

小雪「うえ？うゝん……友達がいなかったから何して遊んだらいいかわからないや」

そういえば、神の願いの動物との会話があったな……使つか

ピーーーーーー

指笛を吹くと草むらがガサガサと動いた、

そして、野良猫が出てきた

本当にできた

猫「ニャー？（読んだ？）」

おおーほんとに声がきこえるわい

小雪「わあびつくりした、いきなり猫ちゃん出てきた」

隼人「実はこの子と一緒に遊んでほしいんじゃが」

猫「ニャー（いいよー）」

そして小雪と猫は追いかけてこをしたりして遊んでいる。

小雪「ねーハヤトー一緒に遊ぼう」

隼人「ああ、今いくよ」

そして夕方まで二人と一匹で遊んだ。

小雪「じゃあまたねー」

隼人「ああ、またな」

猫「ニヤニヤー（またな）」

隼人「ありがとうな、わがママを聞いてもらって」

猫「ニヤニヤーニヤ（僕も楽しかったからいいよ）」

猫「ニヤニヤー（また呼べば駆けつけるから、気軽に呼んでいいよ）」

隼人「ああ、すまないな助かるよ」

そして猫も去って行った。

隼人「さて、小雪の親には注意しておかねばな」

そして隼人も家に帰って行った。

隼人 s i d e e n d

続く……

二話 小学生になり友達になる（後書き）

すいません小雪の旧姓がわからないので勝手に決めました、間違えてたらすいません、次話は小雪と共にあの二人組に会うと思います。

三話 無敵超人と小雪に友が増える（前書き）

感想に若者言葉と混ざってる意見があつたんですが一応若者言葉でこれからは統一していきます。

一応隼人は風間ファミリーとは縁が無く原作開始時に会うというようにします

三話 無敵超人と小雪に友が増える

隼人 side

小雪「ハヤト〜こっちだよ〜」

小雪と会ってから毎日のように一緒に遊んでいた

いつもの公園に行くとそこにはどこか暗い雰囲気少年が二人ベンチに座っていた。

隼人「なにかあったのかな？」

すると

小雪「ねえ〜どうしたの〜」

小雪が二人組に話しかけていた。

???「誰ですか？あなた達は」

すると少し肌の黒い男の子が言ってきた。

小雪「僕は小雪、こっちはハヤト」

ハヤト「風林寺 隼人だ、よろしく」

???「僕は葵 冬馬です、こちらは…」

???「井上 準だ」

小雪「よろしくね、準、冬馬」

一応二人に話を聞いておくか。

重い話になるかもな一応小雪にはきついかもしれないからな

ピーーーーーー

冬馬「何をしているんですか？」

隼人「まあ見ていたらわかるよ」

ガサガサ

そしてあの猫が出てくる

猫「ニャー（読んだ？）」

すると、二人はびっくりした表情をしている。

隼人「すまんが小雪と一緒に遊んでくれんか？」

猫「ニャ（わかった）」

そして猫は小雪の方に向かって走っていき一緒に遊び始める。

そろそろ聞くかの

隼人「何かあったのか？」

すると二人の肩がビクツと少し動いた

隼人「どこか暗い雰囲気だったからな、何か合ったのかと思ってな」

すると冬馬が口にしたのは驚愕の事実だった

冬馬「私の家は葵紋病院というところでしてね、最近親の様子がどこかおかしかったので後を追ってみると入って行った部屋の中を覗いたんです、そこには病院の不正が行われていた資料があったのですよ」

隼「それで若と俺でどうしようか悩んでいたらあんたらが来たんだ」

なるほど親の仕事の不正を見つけたのか、それは暗い雰囲気にもなるな。

冬馬「父は患者のみんなからも信頼されている大人だった、だが、それが裏ではあんな汚いことをしていたなんて、しかも私にもその、親の血が流れているんですよ」

隼人「で？お主はどうしたいんじゃない？」

冬馬「わからない、私は何をしたいのか、今まで信じていたものがなくなっただけがしたいのかも」

隼人「俺が言えるのはお前はお前だ、親は親だ、だから親にあれこれ言われたのをやるんじゃないかってお前が自分で決めたことをやればいい」

冬馬「自分で、決めたこと」

隼人「そうだ俺からはそれくらいしか言えることはないからな、別に親が不正をしているからって俺はお前達のことを責めることはしねえよ」

すると二人は少しの間話し合って何かをすることを決めた顔をしていた

冬馬「ありがとうございます、私たちはこのことを警察の人に話してみます」

準「あんたのおかげで決めることができたぜ、ありがとう」

隼人「何気にしないでいい、結局決めたのはおまえらなんだ」

すると小雪が呼んできた

小雪「ねえ〜ハヤト〜トーマ〜ジュン〜一緒に遊ぼうよ〜」

隼人「おうわかった〜ほら行こうぜ二人とも」

冬馬・準「いいんですか？（いいのか？）」

隼人「小雪が呼んでんだ、いいと思ったから呼んだろ」

小雪「は〜や〜く〜あ〜そ〜ぼ〜」

隼人「おっと小雪が怒り出しそうだな、さっさと行こうぜ」

冬馬・準「ええ（ああ）」

そして俺たちは日が暮れるまで一緒に遊んだ

小雪「楽しかったね」

隼人「そうだな、お前らはクタクタみたいだな」

冬馬「ええ、こんなに外で遊んだのは初めてですからね」

準「なあ、二人とも俺達の友達になってくれねえか？」

隼人・小雪「何言つてんだもう友達だろ（でしょ）」？

隼人「俺たちはそう思ってるけどな」

小雪「うん、僕も友達だと思ってるよ」

しばらくしてから

冬馬「ありがとうございます」

準「ありがとう」

それとなんか敬語がなかったから気にしてないが言っておくか

隼人「一応お前らより一つ年上だがよろしくな、あと別に敬語は使わなくてもいいからな」

冬馬「年上でしたか、すいませんいきなりタメ口で話してしまつて」

隼人「まあいいよ、これからは初対面の人にはできるだけ敬語にしないと特に準はな」

冬馬・準「わかりました（わかつた）」

そして二人の友達が増えた。

次の日の朝ニュースで葵紋病院の不正が報道されていた

隼人 s i d e e n d

続く……

三話 無敵超人と小雪に友が増える（後書き）

変なところがあったら申し訳ありません。

次回で小雪の母に無敵超人の技が炸裂！！！！できたらいいなと思っ
てます

四話 無敵超人小雪を救う（前書き）

原作とちがうところもあるかもしれませんがそこは気にしないでください

四話 無敵超人小雪を救う

隼人 side

あれからはよく四人で一緒に遊んでいたが事件は起きた

俺達は冬馬と準とあつた公園で小雪を待っていた

隼人「遅いな小雪……いつもは一番に来て待っているのに…」

冬馬「そうですね、たしかにおかしいですね」

準「みんなで迎えに行くか？」

たしかに今日はなぜか朝から嫌な予感がしていた

隼人「そうだな、迎えに行くか、何か嫌な予感がするし」

冬馬「隼人の嫌な予感は大抵当たってますしね、急いでいきますよ準」

準「何か合ったら大変だしな」

そして俺たちは急いで小雪の家に向かった

そこで見たのは小雪の母が小雪の首を絞めて殺そうとしているところだった

隼人「小雪になにしてんだああああああ」

俺は窓をたたき割って小雪を助けに向かった

隼人 s i d e e n d

小雪 s i d e

僕はいつものようにみんなのところに行こうとした、でもお母さんに止められた

母「小雪？どこに行くのかしら？」

小雪「・・・・・・外に行く・・・・」

僕はそう答えた、でもこんなことになるなんて思ってもなかった。

母「そう、でも、もうあなたの面倒を見るのも飽きたの・・・・・・もう、死んでちょうだい！！！」

そして、お母さんは僕に包丁で切りかかってきた。

ザシュ！！

小雪「あぐう！！・・・・・・痛いよ、お母さん・・・・」

僕はかろうじて避けたが腕にかすって血が出ている

母「あなたは知らない子なのよ、だから私があなたを殺すのよ！！！！」

そして痛みで動けない僕の首を絞めてくる

母「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」

小雪「ぐっ・・・くる・・・し・・・い」

母はそれでもどんどん首を絞めている手に力を入れるづける

隼人「小雪になにしてんだあああああああ」

そして助けが来てくれた、それは、僕に初めの友達になってくれた人だった

僕が見たのはそこまでだった

小雪sideend

隼人side

隼人「小雪になにしってたあああああああ」

そう叫び、俺は小雪を助けるために小雪の母親に突っ込んで行った

隼人「おらあ」

パソコン！！！！

俺は小雪の母親を気絶しない程度に力を抑えてぶん殴った

隼人「小雪！！！！大丈夫か！？」

小雪を見ると外傷はあるが命に別状はないようだ

母「くっ！！！何を・・・邪魔してくれてるのかしら」

そう言い小雪の母親はフラフラしつつも立ち上がる

隼人「何を・・・だと？」

こいつ薬もやっているから何をやっているのかわかってないのか

隼人「お前は人を殺そうとした、それはやってはいけないことと小雪が危なかったから

助けた、それだけだ」

おそらく冬馬と隼もさっきの光景を見ていたから警察にも電話しているだろう

母「その子はいらない子だから殺すのよ、邪魔しないでちょうだい」

隼人「黙れ！！！小雪をこんなにしておいて、まだそんなことを言うか、もはや救いようが

ない、なら、俺が小雪を殺そうとするなら俺は小雪を守る」

隼人「来るなら来い、次は手加減はせん……」

そして、俺はいつでも攻撃できる態勢を取った

母「子供が大人に勝てるわけないでしょ、いいわ、こうなったらあなたも小雪と

一緒に殺してやるわ」

そして落ちていた包丁を拾い構えて突っ込んでくる

隼人「もう貴様は動くな…」数え抜き手 四！三！二！一！！」

ドス！！ドス！！ドス！！ドス！！！！！！

ちなみに手を気で覆って致命傷にはなっていない、死ぬほどの激痛はある

母「がはっ！！！！」

バコオン！！！！

小雪の母親は数え抜き手の衝撃で壁に叩きつけられて気絶した

冬馬・隼「小雪！！！！大丈夫（か！？）ですか！？」

冬馬と隼が中に入ってきて小雪の近くに来ている

隼人「命に別状はない、気絶しているだけだ」

冬馬「そうですか・・・よかった・・・このことは警察に電話したのもうすぐ

来ると思います、救急車も」

隼人「そうか、とりあえずおそらく包丁で切られたから血が出ているから止血しておいた

方がいいからな」

そう言つて、俺はTシャツの袖を破いて腕の傷の包帯代わりした

それから5分後に警察と救急車が来て事件は終わった、俺は過剰防衛で警察に連れて行かれたが外傷がなく気絶していただけなので小学生ということもあつて、「これからはしないように」と怒られただけで済んだ。

小雪は腕の傷の治療と新しい親を探すために入院した

余談だが親にも小一時間ほど説教されたのは言つまでもない。

隼人 s i d e e n d

そして一週間が経った後、小雪は冬馬の知り合いの養子になることになり名前が榊原 小雪になった。

そして、時は小学校の卒業式になっていた……

続く……

四話 無敵超人小雪を救う（後書き）

今回も変なところがあるかもしれませんが許してください。

次回で世界の旅に出ているんな出会いをしますが飛ばさせてもらいます

申し訳ありません

ちなみにマルギツテは旅の途中に出会ってそこで隼人の本気を見て惚れて告白して隼人もOKを出します、ということにします。

マルギツテとは川神学園で再開するまで出てこないのでもんな流れにしてしまつてすいません。

辰子との出会いをどうしようか考えてないのでこんなのがいいなという希望があつたら教えてください。

五話 無敵超人卒業そして友と別れ旅に…

隼人 side

今日は小学校の卒業式、あの事件の後は以前と同じようにいつも通りに四人で一緒に遊んだりしていた。

隼人「今日でやっと小学校を卒業が二度目となると精神的にしんどいな……」

そして、卒業式は終わり、いつもの四人で集まっている。

冬馬「卒業おめでとうございます」

準「おめでとさん」

小雪「おめでとう」

三人は卒業は祝ってくれた

冬馬「そういえば、中学はどこに行くんですか？」

準「そういえば、聞いてなかったな」

俺はやりたいことがあるからな。

この後のことを三人には伝えておくか。

隼人「俺は中学には行かねえよ、高校に入るまでは世界の道場破り

の旅に行くからな」

旅に出ることを伝えると三人の表情は歓喜から驚愕に変わった

冬馬「どうして、いきなり旅など？」

隼「そうだが、なんで今まで言ってくれなかったんだ？」

小雪「そくだよ」

まあ、そう聞くに決まっているよな

隼人「そりゃ決まってるだろ、びっくりさせたかったんだよ」

隼人「つつても三、四年経ったらここに帰ってくるしな、高校は川神学園に決めてるし、三、四年経てばいつでも会えるさ」

冬馬「確かにそうですが……」

なんか暗い雰囲気になっちまったな

隼人「つつても旅に出るのは来週だからな、それまでは少し時間があるしな」

隼人「一応携帯をもってるしな、それに掛けてくれたらいいさ」

小雪「ねえ、ハヤト、ほんとに行くの？」

隼人「学校を卒業したらずっと行く気だったしな、金だって準備したしな」

金は主に宝くじとか競馬とかでだがな

隼人「まあ今まで黙ってたのは悪かった、これは俺が決めたことだからなお前らに余計な心配をさせた　　くなかったんだよ」

そう言つて俺は三人に頭を下げた

そして

冬馬「わかりました、もう何も言いません、でも絶対に此処に帰つてくると約束してください」

準「そうだが、俺たちはいつも四人でいたんだ、知らない間に一人欠けているなんてシャレにならんか　　らな」

小雪「そうだよ、友達なんだから此処に元気な姿で帰ってくるんだよ、約束だよ」

三人がこんなに思っていてくれるなんてな

隼人「ああ、約束するよ、必ずここに帰ってくるよ」

俺は三人に約束した。

冬馬「では、これでこの話は終わりでこの後はどうしますか？」

小雪「いつも通りあそぼ」

準「そうだな」

隼人「なら、どこで遊ぶか決めるか」

そして俺は旅の出る前日までいつも通り過ごした

〜一週間後〜

俺は今家族といつもの三人と一緒に空港にいる

碎牙「いいか、必ず帰ってこいよ、帰ってこなかったら勘当だから」

静羽「そつよ必ずよ、約束の期限を過ぎて帰ってきたらお仕置きですからね」

お仕置きは勘弁してほしい……あれはきついからな（遠い目）

冬馬「健康には気を付けてくださいね」

準「寝るときは暖かくして寝ろよ」

お前らは俺の母親か！！

静羽「母親は私よ」

さりげなく心を読まないでほしい

小雪「約束破つたら僕もお仕置きするからね」

隼人「大丈夫だよ、約束は守るよ」

そろそろ飛行機の間か

隼人「じゃあそろそろ行くよ」

そして俺はゲートの方に歩いていく

冬馬・準・小雪「いつてらしゃい!!」

三人の声が聞こえた

ありがたい

隼人「行ってくる!!!!!!」

そして俺は世界の道場破りの旅が始まった

隼人 side end

三人称 side

碎牙「行っただか……」

静羽「行きましたね……」

息子の旅路を嬉しそうにしつつも寂しそうな表情をしている二人

冬馬「さあ、やることが決まりましたね」

準「若？」

小雪「トーマ？」

冬馬「彼は川神学園に入ると言っただですよ、なら、再び四人一緒になるには川神学園に入らなければ いけないんですから勉強をして川神学園に入学して逆に驚かせてやるんですよ」

準「たしかに驚かせるには十分だな」

小雪「えゝ勉強きらい」

彼らも川神学園に入るのを決意する

そして彼らは再び出会う

三人称 s i d e e n d

続く……

五話 無敵超人卒業そして友と別れ旅に…（後書き）

次回も時間を飛ばします、何度も時間を飛ばして申し訳ないです。
ちなみに、次話は川神学園の2年からスタートします原作の前です
ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0241y/>

真剣で最強は恋してる

2011年11月3日02時13分発行